

令和4年度英語教育改善プラン推進事業【富山県】

□ 児童生徒の発信力強化のための効果的な指導・評価

■ 学校種間連携

■ 英語担当教師の指導力・英語力の向上(小学校担当教師の指導力向上)

当該地域における英語教育の課題

①教師の指導力・英語力の向上

- ・中学校において、求められる英語力を有する英語担当教員の割合は、令和元年度から令和3年度にかけて増加したが、まだ目標値には達していない。
- ・中学校・高校において、英語担当教員の授業における英語使用状況が十分ではなく、授業改善や指導と評価の一体化の推進が必要である。

【出典】令和3年度英語教育実施状況調査

②小・中・高等学校の連携

- ・令和2年度より小中学校教員合同の研修会、令和3年度より小中高教員合同の研修会等を実施してきたが、校区それぞれにおける有効な連携にはつながっておらず、指導の連続性が確保できていない。

<実施内容>

◇ 運営指導委員会による研修【高】(課題①)

富山大学の英語教育を専門とする教授を含む運営指導委員が学校側と研究の方向性について協議しながら、継続的に研修協力校の指導にあたった。また、研修協力校で運営指導委員会・公開研究授業の実施、英語の指導法についてのワークショップ形式での協議、運営指導委員会による指導・助言を行った。

◇ 英語教員研修会の実施【高・中】(課題①)

学習指導要領に対応するための授業改善を通じた指導力の向上を目指し、中学校は4年に1回悉皆、高校は全県立高校より1名ずつの参加とし、研修会を実施した。中学校では「指導と評価の一体化」に関する大学教授による講義の後、「知識・技能」「思考・判断・表現」の評価について、長文問題の設問を基に協議するワークショップを行った。また、英語資格・検定の問題を解く時間を設け、自らの英語力に目を向け、英語力向上を図ろうとする契機となるようにした。高校では、評価の在り方に関するワークショップや研修協力校の中間発表を行った。

◇ 英語力養成研修会の実施【小】(課題①)

外国語の指導力と英語力の向上を目指し、県内全小学校1名の悉皆参加とし、研修会を実施した。大学教授による講義では、実際の授業の具体を体験し、効果的な教材やクラスルームイングリッシュの活用を学ぶことで、指導力の向上を図った。

◇ ALT研修会【高】(課題①)

全てのALTとJTEが参加する参集研修とし、全て英語で実施した。参加者のニーズに合わせた講義とワークショップを展開した。

◇ 研究協力校における課題研究の実施【高】(課題①)

学習者用デジタル教科書を使用した効果的な授業法の開発と、タブレットを用いた海外とのオンライン交流の実施方法の研究を行った。研究成果については、英語教員研修会等において、随時他校の英語教員にも周知した。

◇ 異校種合同研修の実施【高・中・小】(課題②)

小学校教員対象の「英語力養成研修会」と、中高教員対象の「英語教員研修会」について、教員が情報交換できる機会として小中高の異校種合同研修を実施し、地域ごとの異校種交流の場を設定した。協議では、地区ごとに、小中高教員合同の班で、外国語指導におけるICTの活用法について、観点別学習状況の評価の手法について等、情報交換・協議等を行った。

◇ 研修協力校の設置【高・中・小】(課題②)

小・中学校においては県内東西1校ずつ、高校においては英語教育を牽引する1校の計5校の研修協力校を置いて研究を進めた。「研究報告書」を作成して、県下の小・中・高校に配付し、その研究成果を広めた。

<成果指標に基づく成果及び検証(1)アンケートによる意識調査>

■ 課題①に対する成果検証

各種研修後のアンケートには、授業改善の視点をもった回答が多く寄せられている。大学教授等の講師を招いた研修であっても、ワークショップや演習を取り入れ、教員自身の主体性や気付きを生み出すことができるように計画したことが一因ではないかと考える。さらに、「評価につながる指導等について他校の先生方と共有することで新しい視点が得られたので、今後の授業改善に生かしたい」など今後の自己研鑽を意識した回答も多く、自分に必要な英語力・指導力の向上について改めて考える機会となったことがうかがえる。実際に、研修受講後に受講者が実施した研究授業等では、指導と評価の一体化を意識した授業構成が見られた。また、コロナ禍により全国的に研修の在り方の見直しやオンラインの活用が進む中で、参加者の交流を深めるため参集研修としたが、「直接の話し合いの好機となった」という回答が多く、参集研修の意義が再確認された。

■ 課題②に対する成果検証

研修会では効果的に異校種間連携が図られるよう、共通した課題（CAN-DOリスト形式による学習到達目標の活用、ICT活用、評価の充実等）をテーマとした。「今後の指導の一貫性や指導の連続性を考える機会となったことが、回答の多くから読み取れる。研究授業等を同校区の他校種の教員へ公開することを検討する学校も増えてきた。

<成果指標に基づく成果及び検証(2)R4 英語教育実施状況調査による数値検証>

■ 課題①に対する成果検証

- ・教員の英語力 【中】 54.7%(+1.7pt) 【高】 85.9% (-1.7pt)
- ・生徒の英語による言語活動時間の割合 【中】 70.2%(+1.6pt) 【高】 62.8% (-0.5pt)

中学校では両方の指標においてポイントは増加し、高校においてはやや減少しているもののある程度の水準は保たれている。高校においては、研修会参加者の学びの学校内での共有が不十分であることが考えられるので、研修内容について、各校の教員間での共有を一層進める方策の検討が必要がある。

■ 課題②に対する成果検証

- ・高等学校における小・中学校との連携 87.9%(+6.8pt)

研修会を活用した連携が多く見られた。研修会以後の地域における連携や、研修協力校の他校種への研究授業の参観呼びかけ等、今後も継続して進めていく。

<今後の方向性>

■ 課題①に対して

授業改善と指導と評価の一体化を一層進めるために、研修協力校による研究実践や英語教員研修会、小学校外国語指導力等向上研修会でのニーズに合った研修の提供など、現在の取組を発展させながら継続する。

研究課題：指導と評価の一体化に資するICTを活用した授業実践と評価

■ 課題②に対して

他校種の指導法が参考になったとの声が多かったので、小中高校教員合同研修会で、情報交換・協議の時間の設定を継続する。また、CAN-DOリスト形式による学習到達目標の設定と公表、また各校種での達成状況の把握により、小・中・高校における指導の連続性の共通理解を図るとともに、校区の児童生徒の実態に応じた指導の充実を目指す。

- 数値目標：
- ・学習到達目標の設定 【小】 R4 78.5% → R5 100.0%
 - ・学習到達目標の公表 【中】 R4 47.4% → R5 100.0%
 - 【高】 R4 59.2% → R5 70.0%
 - ・学習到達目標の達成状況の把握 【中】 R4 65.8% → R5 100.0%
 - 【高】 R4 63.3% → R5 75.0%

成果普及

○令和4年度 英語・グローバル教育充実事業 とやまグローバル人材育成促進事業
「研究報告書」 <https://www.pref.toyama.jp/kurashi/kyouiku/gakkou/keikaku/index.html>